精神障害当事者による「病の語りを聴く」講演会

DATA

- **主な連携先・メンバー**
  桃山学院大学教授 栄セツコ氏／家族SST交流会：堺 川辺慶子氏／リカバリープロジェクト「心音」：豊中市 宮田理美氏
- **活動地域**
  関西大学堺キャンパス
- **活動期間**
  2019年度～継続中
- **活動資金**
  堺市と関西大学との地域連携事業

活動の目的

1. 精神障害のある方の支援方法の一つとして近年実践されている、当事者自身が自己の病について語り、エンパワメントやリカバリーを図る活動を普及させること
2. この活動をしている協力機関から当事者の方々を語り部として招き、学生や市民が、語り部の生活のしづらさを聴くことで、精神障害者に対する偏見をなくし、当事者目線を理解すること

連携にいたる経緯

人間健康学部の福祉と健康コースの学生は、卒業後に福祉の仕事に従事する者も多い。学生時代に精神障害当事者の人たちの語り活動を知ることは、将来の仕事の幅を広げるものと考えられる。そこで、このような活動の中心となって活躍しておられる栄セツコ氏に依頼して講演会を実施することになった。

活動内容

講演会では、コーディネート役の栄教授から精神障害のある方がリカバリーする方法として、本人自身の語りを他者に聴いてもらうことの大切さが話された。語り手と聴き手の間に生じる関係が、聞き手にも語り手にも働きかけて、共感的理解を生じるというもの。

当事者の語りとして、宮田理美氏（リカバリープロジェクト「心音」：豊中市）より、症状が現れて、自分自身の辛さを家族にすらわかってもらえないこと等が話された。現在は、自助グループの活動に参加して、落ち着いた生活を過ごしている。

そして家族の語りとして、川辺慶子氏（家族SST交流会：堺）から、統合失調症の娘との関わりの難しさや親がどのようにコミュニケーションを取ればいいのかなどの話がされた。当事者本人を支えていくには、身近な人たちの存在が大切であり、どのように支えるかということが重要だと学んだ。

活動の成果

1. 精神障害を他人事と考えている人が多いが、実は私たちは日々様々なストレスに晒されており、いつ精神的なしんどさを抱えるかわからないことに気づくことができた
2. 精神障害のある人たちの生きづらさを聴くことで、私たちが日ごろどのように接すればよいのかについて、多くを学ぶことができた

今後の課題・目標

1. 今回は、一方的に語りを聴くという形式で行ったが、少人数の形式でも行うことができればさらに深い学びを生むことができると思われる
2. 少人数のグループに分けて、双方向で語ることと聴くことをできるような形式について検討していきたい

教員紹介

■ 人間健康学部 教授

狭間香代子
Kayoko Hazama

ソーシャルワーク実践論を中心に教育、研究を行っている。具体的なソーシャルワーク支援の場での実践論の応用に関心が高く、研究を進めている。